

# 棚田学会通信

第9号 2003年3月1日

発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町6-5-3

(ふるさときやらぼん内)

TEL: 042-381-6721

FAX: 042-383-8614



恵那市中野方の坂折棚田

## 目次

### 表紙の写真・岐阜県恵那市中野方の坂折棚田

#### 巻頭言

第9回全国棚田(千枚田)サミット開催地 岐阜県恵那市～平成15年9月5日、6日開催  
.....岐阜県恵那市長・森川正昭… 1

#### 各地の情報

“まるで和風の庭園”～三谷いしがき棚田オーナー制度の紹介  
.....(社)徳地町農業公社事務局長・水津幹男… 1

日本の棚田百選“タガメも棲む田毎の月”乙大木谷の棚田  
.....佐用町乙大木谷棚田保全組合副会長・中戸 健… 2

棚田と市町村合併.....三重県紀和町長・下川勝三… 3

加美町の棚田現地見学会・研究会に参加して.....金丸澄子(兵庫県神戸市)… 4

#### 官庁ニュース

多様な者による市民農園の開設を可能にする特区について  
.....農林水産省農業振興課・高橋泰吉… 5

#### 日本の棚田百選紹介

石畑の棚田(栃木県茂木町).....安井一臣(東京都練馬区)… 6

#### 事務局からのお知らせ

## [巻頭言]

## 第9回全国棚田(千枚田)サミット開催市 岐阜県恵那市

～平成15年9月5日、6日開催～

岐阜県恵那市長 森川 正昭

恵那市は、岐阜県の東南部に位置し、名古屋から約60km、JR中央線または、中央自動車道を利用し1時間の距離など、地の利に恵まれ、最近では首都機能移転候補地にもなっており、人口36,416人(平成15年1月1日現在)の中山間地域です。

周辺には、恵那峡をはじめとして馬籠・妻籠に代表される木曾路、城下町岩村(岩村町)、日本大正村(明智町)、恵那山などたくさんの観光スポットがあります。この中でも、恵那市の特徴として、大正13年に我が国最初のダム式発電所大井ダムが建設され、ダム湖とその両岸にそびえる奇岩により、美しい景観が作り出された恵那峡には、毎年多くの観光客が訪れます。そして、大井ダムのほかに同じ木曾川に笠置ダム、支流の阿木川には阿木川ダムがあり、3つの大きなダムを持つ市です。

中心市街地は、江戸時代の宿場町大井宿として発展してきました。今でも古い街並みや多くの史跡があり、往時をしのばせています。平成13年には中山道69次の浮世絵版画を中心とした「中山道広重美術館」が中心市街地のシンボルとしてオープンしています。

また、先人達が築いた景観と文化的財産である笠置山と、その山麓に広がる「坂折棚田」が日本の棚田百選に認定され、恵那市のシンボルとしての整備保全の取り組みが進められています。平成

11年6月に坂折地区全体を対象とし、農用地総合整備事業の実施設計を行ううえで必要な整備方法や保全方法等を、学識経験者のアドバイスを受け、全国の事例を参考にしながら検討をするため、早稲田大学の中島峰広教授を委員長に選任し、地元農家、自治会、学識経験者、行政からなる「恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全構想検討委員会」を創設しました。

検討委員会では、棚田についての調和のとれた整備及び保全を行うため、当該地区の農家の意向を把握し、中山間地域の農業振興及び地域づくりを踏まえて、棚田の整備・保全の方策及び利活用について検討され、平成12年3月に「恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全構想」が提言されました。

本市としては、その提言を踏まえ、本地区の地形条件、農家の意向を基本にしたゾーニングを行い4つのエリアに区分し各種事業を実施し、全国にもあまり類を見ない「棚田の整備・保全」に取り組んでいます。

このように本市は、「いきいき田園交流都市」を掲げ、恵まれた環境を生かし、自然と都市機能がバランスよく調和したまちの実現を目指しています。

会員の皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

## [事例報告]

## “まるで和風の庭園”～三谷いしがき棚田オーナー制度の紹介

(社)徳地町農業公社事務局長 水津 幹男

山口県徳地町の三谷いしがき棚田オーナー制度は、町の中心地から国道489号線を北へ8キロのぼり、県道大内鹿野線を東へ5キロ入った大字三谷の木地屋・奥谷という山間の2集落で開催しています。

当地区は、石垣の多い徳地町の中でも特に景観の良い所で、山の中腹まで急峻な棚田が開け、家屋が程よく点在して調和のとれた田舎の風景をつくっています。また、ここには石垣棚田のほか、猪垣、暗渠垣(蛇石)、背戸岸、踏石など、学術的にも貴重な石積が見られ、訪れたある学者は、中国地方一の石造文化と讃え、ある女性新聞記者は“まるで和風の庭園”と紹介しています。



今年にはオーナーが30組に増えます。

しかし、30戸69人の住民のほとんどはお年寄

りで、棚田存続はもとより集落の維持にも赤信号が灯っている地区です。

「農作業体験を通して都会の人から元気もらい、こちらからは自然の恵みをおすそ分け、そして自分たちで棚田を守って行こう」と、私たち公社がここに農園利用方法のオーナー制度の話をしたのは一昨年の12月でした。最初は戸惑いもありましたが、決まったのはある農家の「このままではこの地区は死んでしまう、とにかくやってみようじゃないか」の一言でした。

それからは、とんとん拍子で進展、その日のうちに会の結成を決め、誰もが参加できるようにと



黄金色に輝く和風の庭園

## 日本の棚田百選 “タガメも棲む田毎の月” 乙大木谷の棚田

兵庫県佐用町は、県の西端、千種川の支流に位置し、乙大木谷地区は平安時代以来、ほぼ形を変えずに保全されてきた美しい石積みの棚田が、標高200mから300mにあり、平均勾配10分の1以



オーナー田の田植え

会員は住民全員とし、名称は地区のシンボルである石垣を入れ「三谷いしがき棚田会」と命名。年内には6人の土地提供者による、20組のオーナー田を決定、都市住民との交流による農地保存がスタートしました。

4つの農作業体験と3つのイベント、そして野菜市の開催、いずれも多くオーナーと住民が参加しての催しとなりました。そして12月1日、しめ縄づくり、ソバ打ち体験・試食会をもって、1年目の全日程を無事終了。最初の頃はぎこちなかった対話も収穫祭のころには、すっかり自分流の交流ができていました。

農作業体験での生き活きた指導ぶり、イベントでの田舎料理の紹介、またそれを世話する地区住民たちの表情には、今までになかった何かが育っている“様”を私共を感じさせてくれました。

—今年30組のオーナー田で開催します—

このオーナー制度の開設にあたって、いろいろとご指示いただいた佐々木卓也理事、昨年夏千葉県からオーナーの紹介で現地に來られご指導をいただいた中島峰広副会長、両氏にこの紙面をお借りしまして厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

これからもご指導のほどよろしくお願いします。

佐用町乙大木谷棚田保全組合副会長 中戸 健

上、団地面積23ha、水源は天水、小川を挟んで2本の町道があり、山側に民家が20戸、人口50名、高齢化率60%です。

営農の状況は、棚田11.4ha、988枚、農家数16戸、10a当たり収量465kgです。

### 棚田交流人の受け入れ

平成9年、町産業課より県の棚田指定を受け、交流人により水田の保全を、との提案があり、たびたびの会合で話し合ってきました。乙大木谷は、過疎化、高齢化と米の価格の低迷により、作り手がいなくなり耕作放棄田も多くなっていました。経済的行為として見た場合、棚田における稲作はととも成り立ちません。しかし、先人たちが千余年営々とした営みの中で残してくれた棚田であり、この地域文化の拠りどころを私たちの代で失ってしまうのは忍びない。

この状況を少しでも改善するため、都市に暮らす人々に呼びかけ、棚田のよさ、棚田のもつ機能を理解いただき、かけがえのない地球の生命である水と空気を守り次世代に伝えるため、保全組合

を結成しました。

平成10年、11年は交流人30余名と合同で休耕田の草刈り、和牛で代かき田植え、ジャガイモなど数種類の野菜栽培、稲刈り、人力による脱穀調製、収穫祭などを行いました。

町の宣伝もよく、田植え、脱穀、収穫祭には、テレビ局、カメラマン、見学者など一行事に100余名の参加があり盛大でした。

また、愛媛大学10年来の隣接集落でのピオトープによるタガメの生態系研究の公開により、絶滅が叫ばれているタガメの生息区域であり、貴重な水生昆虫であることを再確認しました。

平成12年、13年は棚田オーナーを募集し6家族14名で実施した。他に山藨(やまぶき)の種からの栽培、棚田米の道の駅での販売、交流人を含めた地区民と交流イベントの開催、写真コンテスト「棚田と農村」も応募が多数あった。

14年は棚田オーナーの募集も早くから行い多数の希望者の中から選考して21家族60名を決定した。地域は大阪府下、県南部を中心に、遠くは、京都、千葉からもあります。6月の田植え、8月の草刈りと桃の収穫、9月の稲刈りと栗拾い、10月の米引取りと交流人、地区民と合同での収穫祭をしています。

昨年は古代米の「朝紫」(紫黒もち米)を試作し、好評を博しています。



春を迎えた乙大木谷の棚田



稔りの秋

## 棚田と市町村合併

寒さがことのほか早く訪れた師走のある日、中島峰広先生から寄稿依頼の電話があり、寄稿という経験がそうそうありませんので、お断りしようかとも思いましたが、電話の向こうの先生の優しい顔を想像しておりますと、そうもいかず、柄にもなく引き受けてしまい、後悔の念にかられつつも筆を持つ次第となりました。

地方分権の最大課題であります市町村合併につきましては、様々な論議の中で全国各地において

三重県紀和町長 下川 勝三

その枠組みや新しいまちづくりについて熱い議論が繰り広げられています。

この地域も同様、過疎高齢化が進む町同志がよりあって、合併研究会なるものを立ち上げ、地域の将来像をどう描いていくか、まさに議論の最中であります。

↓丸山千枚田の夏



アメとムチでもってのこの市町村合併構想、今ではムチがやたらと目についてくるようですが、いかんともし難い地域の事情の中で自主自立をめざし、真の地方分権を求め、将来禍根を残さない判断を強いられているのが今日であります。

我町として何を継承していくべきか数多い課題の中であって、我町の誇る「丸山千枚田」もその一つであります。

農耕文化の遺産ともいべきこの棚田は、町が大きくなるうが、なるまいがその大切さは変わりなく、地域に果たす役割も不変なものであると思えます。

先人の残されたこの偉大な遺産をなんとしても継承すべく、自然環境の保全、地域文化の継承、そしてここに生きる者たちの連帯感を醸成していくことを目的として保存条例を制定したのであり

ます。市町村合併にあたっては、その調整項目が200~300余あり、その中であつても重要な協定項目が少なくても200余あると言われておりますが、その一つに各自治体の持つ独自の特色ある条例等の扱い方についても、議論の重要な部分であろうと考えます。

棚田を守る、このことは自然環境との共生という現代社会で最も重要な部分を占めていることの一つであり、皆認識を一にするとところであると考えます。

このように、各々の地域が持つ資源や歴史、生活文化、産業等をいかに有機的に結びつけ、小さな町でできなかったことを、より大きな町で大きく包み込んでいきながら、共に住みよいまちづくりを目指すのが、市町村合併への一里塚ではと考えるのであります。

## [現地見学会報告]

### 加美町の棚田現地見学会・研究会に参加して

金丸澄子（兵庫県神戸市）

平成14年最後を飾って、兵庫県の加美町岩座神（いさりがみ）が見学会会場になり、初めて参加できたことをうれしく思った。この数年兵庫県の棚田を調査している中で、県のほぼ中央に位置した岩座神の棚田の姿に、畦型とは違う、美しい石垣のとりこになった。役場、神戸大学の津川教授のご指導で除草・景観のため、学生ボランティア、老人会などの手でメキシコマンネン草の定植が行われている。また県下で一番古くからオーナー制度を取り入れている。しかし、交通の便が悪いため、都市部の人には名前さえ知らない人が多い。今回の研究会で見せていただいた“岩座神の四季”の様なスライドを学会からアドバイスして作成、PRに務める必要を感じた。

12月7・8日の2日間、各分野の方々からの意見、神戸大学生の研究発表は内容が充実して良かった。また県下のオーナー制度や交流人の関係者も参加できたのもっと良かったと思う。楽しい交流であったので、次回も必ず出席したいと思っている。

見学会で今は珍しい凍蒟蒻（しみこんにやく）の天日干しを見れたことは感激だった。これこそスローフードの原点で、棚田と共に我々は先人の知恵を残さねばと思いを深くした。また機会があれば、岩座神や関宮町の棚田の調査報告をしたいと考えています。今回は中島先生、事務局の高橋さん、役場の今中さん（元理事）その他大勢の方のお世話になり、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。



見事に積み上げられた石垣の棚田



畑作のオーナーを受け入れている西山地区

[官庁ニュース]

# 多様な者による市民農園の開設を可能にする特区について

(構造改革特別区域法における特定農地貸付法等の特例措置)

農林水産省農村振興局地域振興課 高橋 泰吉

認定を受けることができる者は、

① 農業者、農業生産法人など農地を所有する者が、自己の所有する農地で市民農園を開設する場合には、特定農地貸付が取り消された後において当該農地の適切な利用を確保する方法等を内容とする事業実施協定(②のおいても同じ)を、特区計画の認定を受けた地方公共団体と締結すること。

② NPO法人、民間会社などの農地を所有していない者が、地方公共団体又は農地保有合理化法人と締結すること。

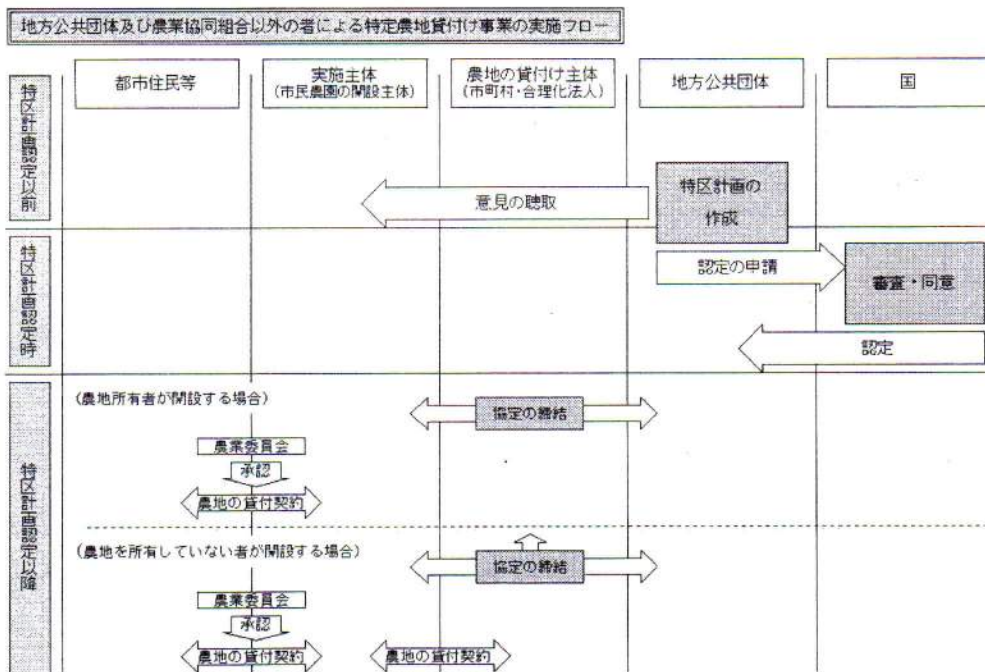
のいずれかの要件を満たす場合に、どなたでも認定を受け市民農園の開設ができます。

なお、認定を受けた農業者、農業生産法人、NPO法人、民間会社などが市民農園を開設する場合には、地方公共団体等が開設する場合と同様に、農業委員会の特定農地貸付けの承認又は市町村の開設の認定を受けることが必要です。

この構造改革特別区域制度を活用され、都市と農村の交流に一層の推進、農村地域の活性化や棚田の遊休農地の有効利用がなされることを期待しています。

農村では、農業者の高齢化の進行などを背景に、「耕す人がいなくなって田や畑がどんどん荒れていくけれど、地域の農業者でこうした農地を引き受けてくれる人がいない」、「荒れている棚田を、誰でもが市民農園を開設し都市住民に農地の貸し付けができるようにしてほしい」といった地域の声が多く聞かれるようになってきました。このような地域の声に応え、都市と農村の交流や地域経済の活性化を図るとともに市民農園の開設により農地の有効利用を図るため、構造改革特別区域制度の下で、NPO法人や民間会社などの多様な者により市民農園を開設し都市住民に小面積、短期間等の一定の農地の貸し付けができるよう特例的な措置が講じられ、本年4月1日からスタートすることになりました。

この、構造改革特別区域制度により市民農園を開設するには、地方公共団体が、遊休農地その他粗放的な利用がされている農地など、効率的な利用を図る必要がある農地が相当程度存在すると認めて設定する構造改革特別区域や開設予定者等を定めた計画を作成し、内閣総理大臣の認定を受けることにより、この認定を受けた者が構造改革特別区域内において市民農園を開設することができます。



〔棚田百選紹介〕

石畑の棚田（栃木県茂木町）

安井一臣（東京都練馬区）

この棚田は栃木県芳賀郡茂木町入郷地区、地元の人たちが誇りにし、その保全に努めている清流「木須川溪谷」の中流域、小和石山の中腹にゆったりと広がっている。総面積4.9ha（水張り面積：約3.5ha）、約180枚の田んぼからなる土坡（どは）の曲線が美しい。地元に残る古文書によると、この地域の棚田は約350年前からその造成が始められているという。



稲が伸び盛りを迎えた石畑の棚田

ここも他の中山間棚田地域と同様に、かつては米作りを中心とする活気ある平和な農村であった。しかし、日本経済の発展に伴う食の洋風化が米余り現象を生み、国の減反政策が始まった1960年代後半から、米作りは集落経済の核としての力を徐々に失う結果となる。その一方、この地域には以前から「シイタケ」という特産品があったため、若い人たちの力がシイタケ栽培に向けられ、干しシイタケが米に代わって地域経済を支えた時代もあった。

それは当時全国的な現象であった若者の農村離れが、他の中山間棚田地域と比べて比較的緩やかであったということでもある。だがそれもつかの間、米の減反政策の次に押し寄せた農産物の貿易自由化という波に、このシイタケ栽培も飲み込まれることとなった。その後はご多分に漏れず、地域の高齢化、過疎化は年ごとに進み、この棚田の総所有戸数11戸のうち実栽培戸数は7戸、大小合わせて約40枚の水田が休耕または耕作放棄されているのが現状の姿でもある。

この田んぼが棚田百選に選ばれたのをきっかけに、地元では駐車場の整備、案内板やトイレの設置など、外部から訪れる人たちの受け入れ態

勢を整えてきた。2000年からは棚田ボランティアの人たちによる耕作放棄田の草刈りや花菖蒲の植え付け、彼岸花の手入れなどの活動も始まり、部分的に荒れ果てていたところも、徐々にではあるが美しい景観を取り戻しつつある。

その活動の延長線として、2002年より棚田オーナー制度が始められた。ここのオーナー制度の特色は、個々のオーナーがそれぞれに割り振られた田んぼで別々に米作り体験をするのではなく、オーナー全員（その家族も含めて）が比較的大きな田んぼで共同作業をすることである。この方式により、各オーナーはそれまでの農作業経験や作業への参加回数などを気にする必要もなく、秋には等しく収穫の喜びを分かち合うことができる。この共同作業を通じて、田んぼを提供している農家や各オーナー同士が家族ぐるみで仲良しになれるという予期しないプラスの効果もあった。



地元の保存会が立てた案内板

さらに、日頃の肥培管理や水の見回りを受け持つ農家の負担も軽くなる。ちなみに、初年度はオーナー総数13組、参加費3万円、共同作業は田植えや稲刈りなど合計5回、節目ごとの作業にはそれぞれのオーナーが家族ぐるみで参加し、各回の平均参加者総数は50名にもなった。秋には各オーナーが新米40kgに加え、お土産としてユズとシイタケを受け取った。

なお、2003年のオーナー数は20~30組に拡大する予定である。さらに、このオーナー制度を、都市住民の米作り体験から、都市と農村の交流の場としての活動に拡大する目的で、近い将来「棚田の里体験交流施設（仮称）」を建設する計画も進められている。

棚田のあぜ道を歩いてみると、農水省が新食

料・農業・農村基本法の中で掲げる「農業の多面的機能の重要性」のほんとうの意味がよく理解できる。

「身土不二」、「地産地消」、「旬作旬消」などの言葉も思い出される。またここは、世界でも最も小型のトンボであるハッチョウトンボの隠れた生息地でもあり、6~7月にかけて、無数のトンボが美しく乱舞する。

石畑の棚田に限らないが、中山間地の急斜面に広がる棚田をじっと眺めていると、「コメを食べたい、一粒でも多く作りたい」という先祖の気持ちがひしひしと伝わってくる。21世紀に生きる私たちは「安全で安心できる食べ物の安定生産」と「悪化した環境の修復」という、基本的に相反する二つの課題を同時に解決していかなければならない。

この難題解決の手始めとして、棚田を一段ずつ築いていった先人たちの気持ちをよく理解することが重要ではないかと思っている。持続可能な循環型社会を築き、それを後世の人たちに引き継ぐために、今、私たちは何を考え、何を行動に移すべきか、ということをして石畑の棚田のあぜ道を歩きながら思いふけた。

石畑の棚田のすぐ近くには、同じ棚田百選の「鳥

山町国見の棚田」や、「残したい栃木の棚田 21」の「牧野の棚田」などもある。学会員の方々が一見されることをお勧めする。

この原稿を書くにあたり、石畑の棚田保存会会長大町弘志氏、地元の農家小森一夫氏の協力を得た。ここに名前を記して謝意を表したい。



畦道に咲くギボウシ(ユリ科)

## 〔事務局からのお知らせ〕

### 第7回談話会

と き 2003年4月12日(土)午後3時~  
ところ 表参道新瀧館「ネスパス」3階  
発表者 渡辺昭次一名月会会長(長野県更埴市)  
テーマ 現場からの報告(仮称)

☆

### 第7回棚田現地見学会

と き 2003年6月28日(土)~29日(日)  
ところ 山形県山辺町他  
泊まり 上山温泉  
テーマ 山辺町大蔵の棚田と山形の暮らし

☆

### 第5回棚田学会大会

総会&シンポジウム

と き 2003年8月3日(日)  
ところ 三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

(詳しくは改めてお知らせします。)

### 〔訂正とお詫び〕

通信8号に寄稿していただいた“星野村の棚田調査・シンポジウムに参加して”で河合享さんの肩書を間違えてご紹介してしまいました。また、誤字もあり、この場をお借りして訂正とお詫びをさせていただきます。

㊦

㊧

国立歴史民俗博物館友の会事務局長→運営委員長  
本文左・上から11行目 ニオイバナ→ニオイヒバ  
本文右・下から2行目 かるたち→からたち

### 〔編集後記〕

棚田学会員の中から、事務局のスタッフに申し出て下さる方がありました。いろんな方々の協力があってこそ棚田地域の活動も活発になっていきます。棚田学会の運営も皆さんの応援で成り立っていることを改めて感じているところです。

今、帰農というテーマを掲げて、40~50歳代の東京の勤労者が、棚田での農作業をしてゆこうという動きがあります。都会の人達が、人生と重ね合わせて農業を考える時代がやって来たのでしょうか。

編集部 T.